

中国“新時期文学”論考：思想解放の作家群

著者	萩野 脩二
発行年	1995-09-16
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017069

中国“新時期文学”論考

——思想解放の作家群——

萩野脩二著

関西大学出版部

中国“新時期文学”論考

—— 思想解放の作家群 ——

萩野脩二著

関西大学出版部

【本書は関西大学研究成果出版補助金規程による刊行】

前 言

一九七六年十月に「四人組」が打倒されてからの、ほぼ十年間の中国文学を、『新时期文学』という。この時期の文学は、大変活発であり、魅力に富み、生き生きしていた。一九四九年の新中国成立を第一の解放とするなら、そしてそれは旧体制からの政治的解放であったのだが、今回は、第二の解放、つまり思想の解放であった。

私にはこの時期を取り扱った論考がいくらかある。作家論にあたる文章は、すでにまとめて発表したことがあるが、いまここでは、それ以外の論考を三つに分けて収集しまとめてみた。

第一の部分は、「作家と表現」とでも名付けられる。第二は、「作家群」あるいは「動向」。第三は、「書評およびその他」である。それぞれの論考は初出の時間から随分経ってしまったものもあるが、この時期の論考の著書が他に少ない現在、一石を投ずる意味でも、まとめて発表することは意義があるであろう。また、当時の中国文学が持った熱気は、当時でなければとらえられないという意味合いもある。『新时期文学』には、拙いながらも熱気があり、その熱気を拙いながらも私はとらえていて、それは、現在の中国をとらえる際の際なんらかの視点を提供しているにちがいない。

『新时期文学』の『新』とは、まず、作家自らが身体的に自由になれたことである。このことは、当時の中国文学の特色となっているが、また以後の中国文学の独自性をも形成している。だから、「文化大革命」が

作家という知識分子にどのように辛いものとしてあったかを確認しておくことなしには、現在の中国や中国文学を語ることはできないのである。私の論考の出発は、このことから始まっているが、それは今でも有効な視点であると自負している。

自由で多様な表現が可能になったと一言で言うのは簡単であるが、それはどのような内実を指して言っているのか。このことを明確にするために、作家たちの用語に注目した。特色ある形容詞などの用語にである。こうすれば、私のような外国人からでも可視的で計量的な考察が可能になると思う。また、文学に対する主観性を幾らかでもこえられるのではないか。

時代の状況を、その基層においてとらえるのは至難のことである。時代状況や思想の動向、こういうものの基盤になっているものに小学校教育があり、そこで培われたもの、いわゆる教養なり、常識を、もつと重視していいのではないかというのが、私の視点でもある。とりわけ思想の枠組みに厳格な中国においては、以上の視点より第一部分は成り立っている。

自由であること、および自由な表現とは、作家にとつては勝ち取るものである。そこで私は、中国の文学動向を重視している。ここでは作家個人の営為よりも、作家群としての方向性に重点がおかれる。自由への動向を探り出すことが、私の大きな関心であった。だが、作品を通じて自由への動向を探り出すということは、常に政治的な締めつけを考慮するということでもある。ここに、良くも悪くも中国「新時期文学」の優位と限界がある。このことは確認しておかなくてはなるまい。だが、このことを冷静に考えてみるならば、なにも中国のみに限らない問題であろう。「文化大革命」という特殊時期にももちろん限らない。とりわけ「戦時下」という時期を経験した日本に共通する問題であるにちがいない。そういう意味で、中国の「新時期

文学²は、日本と通底していると思つてゐる。ところで、重視するとは、持続するという意味も含んでゐることいふまでもない。中国は息が長いのであるから、安易な結論は手ひどいしつべ返しにあうにちがいない。これが第二部分の基調である。

第三の部分はアトランダムなものであるが、それでも私の関心のありどころを無作為に示している。そこであえて、一九八一年夏の趙樹理という作家の故居探訪の文を加えた。この旅行が私の以後の情感を規定しているからである。次々と繰り出される中国文学の諸問題を、この上に立つて、私は考察してしたのである。文革、女流、開放、就学生そして農民など。

以上の視点を心底に持ちつつ考察した文章を幾つか集めたのが、この論考である。どれも十分に深め、発展させていない嫌いがあるが、一応のけりをつける意味で、まとめてみた。今では古くなつてしまつたもの、訂正を要するものなどがある。だが、なるべく初出の形を保存するようにしておいた。恥をさらすことも一つの仕事と思われるし、自らにさらなる発展を要請するものとなるにちがひなからうから。

とはいえ、これらの文章は、多くの先生や先輩、同学の導きと励ましと援助によつて成り立つたものである。気弱な私を常に励まし、気長に指導して下さい下さつた方として、故小川環樹先生と、竹内実先生の名前は、是非とも記して感謝の意を表したい。他にも、小学校の恩師をはじめ数多くの方々の名前を列挙したいが、割愛させて頂く。

本書の刊行は「関西大学研究成果出版補助金規程」によつてなされたものである。この本の出版を許可して下さい下さつた石川啓学長および関西大学出版部の関係者と、この本の出版に際して励まし、出版部に推薦して下さい下さつた大庭脩先生と北岡正子先生には、厚く謝意を表させて頂く。

言

また、最後の「人名索引」は、本学大学院生の奥村佳代子、好並晶の両君の手を煩わせた。あわせて、感謝する。

前

萩野脩二識

一九九五年六月六日

目次

前言

第一章 「新時期文学」——作家と表現……………1

一 文学者の死について 3

二 中国「新時期文学」におけるA B B型形容詞について 65

三 「綠色」への挑戦——張潔から阿城そして莫言へ 88

四 「新時期文学」論への視点——三年を一単位として 109

五 文芸上の極左路線——李劍「歌德」与「缺德」について 137

六 小学課本『語文』札記 154

七 中央文学研究所について 178

八 「晋軍崛起」——地方文壇の気魄 186

九 改革の動揺——中国映画、文芸の描くりアリティ 205

第二章 作家群——葛藤と動向……………217

一 中国当代文学管見——一九八二年の小説について 219

二 一九八三年の文学情况雑感——短編小説を中心に 235

三 第六回優秀短編小説コンクール——『善意』の人物描写に傾く 266

四 第七回優秀短編小説コンクール——人生への吐息 284

五 一九八二、八三年の文学情况 305

六 一九八四、八五年の文学情况 317

七 一九八六、八七年の文学情况 328

八 一九八八、八九年の文学情况 339

第三章 書評その他

一 石上韶訳『巴金 真話集』 349

二 加藤幸子・辻康吾編『キビとゴマ——中国女流文学選』 354

三 小島朋之著『変わりゆく中国の政治社会——転換期の矛盾と摩擦』 356

四 蔣濮著 久保田・松本共訳『何処から来たかは聞かないで』——日本で暮らす中国人の実像 359

五 張賢亮著 大里浩秋訳『土牢情話』、陸文夫著 釜屋修訳『消えた万元戸』 361

六 心やさしき農民——実感的中国農民像 366

七 戴光中著『趙樹理伝』——「時代」への執着と拒絶 377

八 趙樹理の故居をたずねて 380

目 次

人名索引

..... 1

初出一覽

..... 391